

ご意見ご連絡は下記へどうぞ

北海道熊研究会事務局 北海道野生動物研究所内(Tel. 011-892-1057)

代表 門崎 允昭 e-mail: kadosaki@pop21.odn.ne.jp

事務局長 Peter Nichols ピーターニコルス氏

幹事長 藤田 弘志 氏

北海道熊研究会」Hokkaido Bear Research Association

Website は「北海道野生動物研究所」と入力して下さい

「北海道熊研究会報」読者の皆様へお知らせ

2014年8月18日から連日13回にわたり、北海道新聞の夕刊紙面の、「私のなかの歴史」で、「ヒグマ研究45年」と言う題で、私(門崎允昭)が、私の「ヒグマについての考え、人と熊の共存策」等を口述、編集委員の「中尾 吉清」さんが取材文章化し、掲載されました。その第2回目、8月19日(水曜日)掲載をここに再録しますので、ぜひ、お読み下さい。

2014年(平成26年)8月19日

私のなかの 歴史

帯広生まれで6人きょうだいの三男です。1952年、中学2年生の時、父と兄2人、姉と私の5人で登山をしました。日高山脈北部の剣山(1205m)です。午後10時すぎ、帯広発の鈍行列車に乗り、御影駅(十勝管内清水町)で下車。山麓まで約10kmの真つ暗な夜道を歩きました。懐中電灯もない時代です。途中の旭山集落の電柱に裸電球が一つだけとあっていて、その下で休息した記憶があります。

動物学者

かどさき
門崎

まさあき
允昭さん

ヒグマ研究45年 ②



私(左から2人目)が4歳の時の両親、きょうだい6人の家族写真

「ここから奥地はクマが時々出るから、父さんより先を歩いてはだめだ」。父はそう私たちに言い

10月24日
研究
の
新
講
義

父と登山 ナタ携える「礼儀」を学ぶ

渡しました。

父は腰にナタを携えています。

「クマが襲ってきたときの武器になるし木を切ったり、ササやぶを切り開いて進むことができる。山では必需品だ」と効用を話してくれました。

父は十勝支庁(現・総合振興局)

拓殖課に勤務していました。山奥の開拓予定地を調査する仕事です。クマを見る機会は多く、知識も豊富で、仕事では必ずナタを携えていました。

「クマが出る」と聞いた時は恐

ろしかったけれど、父と一緒にのりで、安心できました。

剣山は霊山、信仰の山です。山道に石地蔵が並び、信者が休む小屋がありました。小屋の裏の沢で、水筒代わりの四合瓶に水を詰めました。それから険しい道を4歩歩いて頂上に着きました。

千代付近で見事な雲海が広がり、頂上では透き通る青空に金色の太陽がまぶしく輝いていた。初めて見る別世界。いまでも、あの光景は目に浮かぶ。人生初めての登山でした。

高校、大学、大学院と山岳部で活動しました。山行で、ナタを忘れたことはありません。

クマに刃物で反撃して事なきを得たというケースをお話ししよう。

70年7月、士別市で75歳の農家の男性が山林の下草刈りをしていたクマに襲われ、とっさに、手持ちの草刈りガマをたたきつけ追いかけて逃げた。後に駆除されたクマの頭骨にガマの先端の鉄片が刺さっていましたね。被害者にお話をうかがい、その草刈りガマも頂き、資料として保管しています。

77年3月末、三笠市で山林作業の方がクマにかみつかれ、同僚から投げ渡された手斧で追い払いしました。いずれも、刃物による反撃がなければ、生命にかかった可

能性があります。

70年以降、クマによる人身事故は87件。逃げる際に転んでけがした、といった5件を除くと実質的には82件。ハンター33件(死亡10件)、一般人49件(同20件)。

一般人で刃物で反撃したケースが少ないのが残念です。

私は、クマのすみ場所に分け入るときに、ナタを持つことが「礼儀」だと考えています。自分の命を守り、結果的にクマの命、すみかを守ることになる。

女性だってナタを持つてくたさい。アイヌ民族の女性は、たとえ隣家に行くにもマキリ(小刀)を手に入っていましたよ。アイヌ民族のクマとのつきあい方に学ぶことはたくさんあります。

(聞き手・中尾吉清)